

災害保健医療コーディネータ実習を実施しました（2021/12/18）

テーマ：災害時の保健医療コーディネータ（調整）、本部運営、新型コロナウイルス感染症対策
場 所：東北大学災害科学国際研究所（宮城県仙台市）

2021年12月18日（土）、宮城県仙台市の東北大学災害科学国際研究所において、文部科学省補助金事業「コンダクター型災害保健医療人材の養成プログラム」災害保健医療コーディネータ実習を実施しました。本実習は、宮城県より委託された「宮城県災害医療コーディネータ研修会」を兼ねており、プログラム履修生5名（医療従事者、行政・消防職員など）、宮城県庁職員をはじめとするオープン参加者21名が実習に臨みました。実習コーディネーターを務める佐々木宏之准教授（災害医療国際協力学分野）が会場責任者として実習運営にあたりました。

コロナ禍においても災害は発生し、災害保健医療チームは被災地で活動します。各地から集まる災害保健医療チームを有機的に運用するためには、情報収集・共有、資源配分などの本部コーディネータ（調整）機能が災害対応成否の重要な鍵となります。この実習では、東日本大震災時に石巻医療圏の医療調整本部を支援し続けたNPO法人災害医療ACT研究所の医療従事者が講師となり、当時の実例を題材に本部での情報収集・共有のあり方、本部組織運営について、実践的な研修を行います。一日の総まとめとして、研修の最後に2時間半にわたる模擬本部運営研修を行い、受講者は感染対策を行いながら本番さながらのシナリオに基づいて混乱する本部運営を体験しました。初めて参加した受講者は「訓練で混乱を経験できてよかった。この経験を糧に、実災害時の本番では整然とした本部運営を目指す」と感想を述べていました。

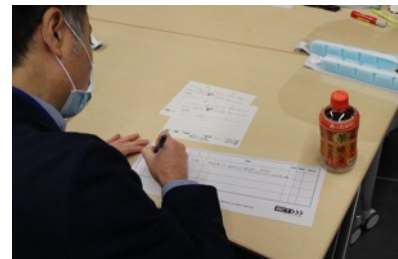
昨年度に引き続いて新型コロナウイルス感染症蔓延を鑑み、受講者定員を大幅に削減して研修を実施しました。受講者同士の間隔を広くとる、換気の励行、手指消毒、マスク・フェイスシールド着用、CO2モニタリングなど、感染対策に万全の注意を払いつつ研修を実施しました。



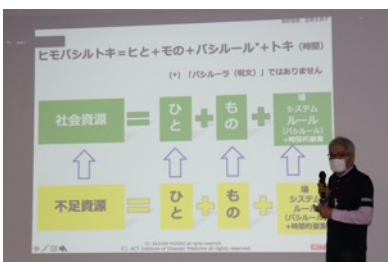
東日本大震災当時の医療体制を解説する宮城県庁職員



本部に集まる様々な確度の情報から被災状況を推定する



他者のメモからクロノロを転載。理解できる記載が必要



資源管理、情報集約について解説する東北大学石井正教授



混乱する本部。リーダーが情報伝達フローを整理する



CO2モニタリングを実施。実習中も換気を励行